

地域とともに

人文社会科学部では、学生だけでなく地域の皆様にもご参加いただける公開講座・学術講演会を実施するとともに、地方自治体や海外大学・研究機関とさまざまな交流をしています。

今年度の公開講座

◇前期公開講座(人間文化コース)

都市と社会—歴史・景観・表象

人間文化コース 教授 石澤靖典 准教授 山本 陸

前期の公開講座は「都市と社会—歴史・景観・表象」というテーマのもと、6月5日から22日までに5回の講座として開講されました。洋の東西を問わず古くから人間は、「都市」を単位として社会を形づくり、さまざまな文化を生み出してきました。講座では都市のもつ機能や構造、多様性について、歴史学、人類学、美術史学といった様々な分野からアプローチしました。



▶松尾 剛次 教授「中世都市鎌倉への旅—タイムマシン松尾号に乗って」(6月5日)

【内容】文献資料に発掘の成果を組み込むことで、日本の中世を代表する都市鎌倉について、その都市景観や歴史、あるいは都市全体の特性について検討しました。

【感想】中世都市鎌倉の歴史的事実と仏教都市としてどう発展していったかについて学ぶことができました。都市の周辺部には刑場などの忌み嫌われているものが配置され、それを目立たなくするために極楽寺などの寺が配置されたことなどが受講していて特に興味深く思いました。

▶新宮 学 教授「隋唐の長安から北宋の開封へ—東アジアにおける「都城」の変容」(6月12日)

【内容】〈市制〉と〈坊制〉を手がかりにして中国の都城の特質とその歴史の変遷を解説し、現在ではあたりまえのことと思われるようになった都市に暮らすことについて考えました。

【感想】開封が黄河大氾濫で埋没し、8mほど地下にあることを知り、日本ではあまり起こらない大洪水の規模の違いに気づきました。すっきり、黄河も揚子江も氾濫の歴史をすっかり忘れていました。

▶元木 幸一 山形大学名誉教授「ヨーロッパ中世都市に生きる芸術—ヒトラーが愛した町ニュルンベルクを例として」(6月15日)

【内容】15、16世紀のニュルンベルクの町で、絵画や彫刻が社会の願望を満たすべく制作され、都市の理念を表明してきた経緯について、さまざまな作品を通して検討しました。

【感想】「ベスト対策など市井の人という視点から街やその歴史を知ることが大変興味深く、面白かったです」「ニュルンベルクという町がとても美しい街であったということ、また、宗教色の濃い町だったということ、85%も破壊されながら昔どおりに復原した力に驚いた」

▶坂井 正人 教授「インカ帝国とチム—王国—古代アンデス文明の都市景観と社会」(6月19日)

【内容】アンデスに栄えたインカ帝国やチム—王国の都市について紹介し、王家に関する神話や儀礼が体系的に組み込まれた都市景観と王国の運営について考えました。

【感想】「都市」の景観を読むことで当時の社会秩序や世界観をかなり把握できると注目した点が面白かった」「インカ帝国は多くの人を知っているが、それよりも早く、長く栄えたチム—王国について知ることができ、大変興味深く受講することができました」

▶中村 篤志 准教授「モンゴル遊牧民と都市—カラコルムからウランバートルへ」(6月22日)

【内容】モンゴルの遊牧民が高原に建設してきた都市の特徴とその中で生きる人々の暮らしについて、匈奴の時代から現代にいたる歴史の中で紹介し、遊牧民にとっての都市の意味について探りました。

【感想】都市・首都に対する見方が色々あること、つまり機能や人を集中させ、権力を示すためのものとは限らないというのは新鮮だった。中国史や鎌倉時代に「付随して」ではなく、モンゴルそのもののお話「聞けたのは、大変興味深かった」。

◇後期公開講座(経済・マネジメントコース)

自由貿易と海外進出—法律・経済・経営の視点から—

経済・マネジメントコース 准教授 杉野 誠

ヒト・モノ・カネ(労働・財・資金)は、近年のグローバル経済が進む以前から国境を越えて経済活動を支えてきました。近年は、グローバル化の進展に伴い、さらにその流動性が高まっています。そこで本講座では、「自由貿易」という広いテーマを設定し、法学、経済学、経営学の視点からアプローチしました。



▶亀井 慶太 講師「なぜ地域貿易協定なのか?—余剰分析からの視点—」(9月21日)

【内容】本講義では、世界全体で急速に増大した地域貿易協定が、世界全体の貿易自由化と比較したとき、果たして望ましいことなのかを考えました。

【感想】貿易を通して、日本だけではなく世界の国々が、よりよい生活ができるようになるにはどうしたらよいかを学んでいきたいです。

▶吉原 元子 准教授「中小企業における海外展開戦略の新段階」(9月28日)

【内容】本講義では、中小企業が海外展開をどのように経営に取り入れるかとその課題について考えました。

【感想】サービス産業の海外展開や自治体が提供する施設について興味深かったです。

▶川瀬 剛志 教授(上智大学法学部)「経済グローバル化の国際ルール—WTOからTPPへ」(10月5日)

【内容】本講義では、WTOやTPP等の国際ルールを概観し、現在のグローバル経済を形作る制度枠組みについて考えました。

【感想】TPPIは単なる関税だけのことで浅い認識でしたが、「全30章」の構成を知り、TPPへの関心が高まりました。

▶溜川 健一 准教授「自由貿易はGDPにどのような影響を与えるか?—マクロ経済学の視点から考える—」(10月12日)

【内容】本講義では、一国経済を対象とした経済学であるマクロ経済学を基礎として、自由貿易化が一国経済にどのような影響をもたらすかを考えました。

【感想】GDPの概念の説明などくわしく説明してくださり、たいへんためになりました。

▶杉野 誠 准教授「地球温暖化対策と自由貿易—産業保護政策になっているのか?—」(10月19日)

【内容】本講義では、自由貿易とは関係が無いように思われがちな気候変動政策に隠された産業保護の影響について考えました。

【感想】国境調整措置の内容が産業に対してどのような影響があるのかに興味を持ちました。

ナスカだより

山形大学人文社会科学部附属ナスカ研究所の最新情報をお知らせします。

ナスカでの発掘

ナスカの地上絵を作った人々はどこでどのように暮らしていたのだろうか?素朴にささげられるこんな疑問こそが実は重要であり、ナスカ文化を解明するカギとなる。当時の人々の生活の実態を知ることなしに彼らの残した痕跡を理解することはできないからだ。こんな考えで現在ナスカ研究所では地上絵が分布するナスカ台地周辺の遺跡で発掘調査を行っている。調査の対象となるのは住居、つまりは家である。

なぜか岩山の斜面に作られている廃墟のような部屋の連りの中に慎重に発掘区を設定する。丁寧に掘っていくと、石で作られた部屋の中に火を燃やした跡がある。その灰の中からは食べ物を調理した後の焦げが付いた容器のかけらがでてくる。なぜか動物のフンと一緒に出てくる。動物のフンが火をつける際に使われる場合があるということをも思い出す。今度は別の場所からピーナッツの殻、トウモロコシの穂などが現れた。この廃墟のような空間で2000年近く昔に人々が暮らしていたことが実感される瞬間だ。

普通の人々が暮らしていた家であるから、建築としては神殿や地上絵のように人目を惹くものではない。調査の中で現れるものも使い古して壊れた土器、石器、糸よりの道具、食べ残しなど日常的なものばかりである。しかし、だからこそそこには人々の生活を理解する

るカギが存在するのだ。今後の分析を通じてどんなふうに関係が構成されていたのかが明らかになってゆくだろう。良いものを食べていた特権的な人がいたかもしれないし、何かを作る職人のような人は特定の場所に住んでいたのかもしれない。一見価値のなさそうなものから過去に光を当てるといっても考古学の一つの面白いところである。



ナスカでの発掘風景

人間文化コース 准教授 松本雄一

留学生の活動レポート

人間文化学科 言語コース 4年 菊地 春香さん



リトアニアに留学して一番変わったことは、留学そのものに対する印象です。留学する前は、明確な目的なく留学はすべきではないと思っていて、私なりの目的を持って留学しました。ですが、留学に行ってみ

ると、今まで苦手だったものを好きになり、また日本について自分がどれだけ無知であり、海外の人が関心を持ってくれるのかを知りました。クレイジーだけど皆に話したくなる友人や思い出ができて、前より自分に自信が持てるようになったりと、当初の目的以上に充実した特別な時間になりました。留学当初は環境の変化に戸惑うこともありましたが、その時に「自分にとって心地よい領域の外に出た時に成長できる」と声をかけてくれた友人がいました。留学すると、まさにそのような環境に自分を置くことができます。想像以上の経験が絶対できると思うので、留学したいという気持ちがある人はぜひ挑戦してもらいたいと思っています!

法経政策学科 公共政策コース 4年 奥山 詩帆さん



私は、2016年9月から10ヶ月間スペインのサラマンカ大学に留学していました。サラマンカ大学は世界遺産に登録されている「サラマンカの旧市街」にキャンパスを持ち、スペイン最古の大学と言われ、世界

各地から留学生が集まる素晴らしい大学です。留学中は基本的に月～木曜日に講義があり、週末は予復習や課題をこなしたり、友達とピクニックや飲みに出かけたりしていました。講義では学生に意見を聞くことが多かったり、2週間に1回の頻度で課題提出があったりと、積極的な学習が求められました。渡航後すぐはスペイン語がなかなか聞き取れず、何をすることも苦労して、つらくなった時期もありましたが、留学中の10ヶ月は人生で1番勉強した期間であり、日本にいたら経験できなかったことだらけの期間でもありました。

この留学経験を糧に、残りの大学生活も頑張りたいと思います。